

佐 世保のお土産といえば「九十九島せんべい」。

発売以来、七十四年に渡って愛され続けているこの銘菓には、知られざる物語があった。

時は終戦までさかのぼる。激しい空襲によって焦土と化した佐世保のまちでは、戦後いち早く平和都市として復興しようという機運が高まっており、その一翼を担おうと小さな菓子店が産声を上げた。最初は客が持ち込んだ配給の粗糖などをあめ玉や煎餅にして販売していたが、郷土を代表するお菓子を作りたい、佐世保の魅力を広めたいという思いから新商品の開発に着手。試行錯誤を繰り返して、ようやく一つの商品が誕生した。縁起物であるべっ甲をヒントにした六角形、その六角形を海に見立て、九十九島に浮かぶ島影をピーナッツで表現。「九十九島せんべい」と名付けられたそのお菓子は、これまでの煎餅にはなかった、パリッという歯切れの良さと、ピーナッツの香ばしい風味で人々を魅了した。

発売の四年後には九十九島が西海国立公園に指定され、東洋一のアーチ橋といわれた西海橋が完成するなどして、佐世保のまちは発展。それに伴って、九十九島せんべいも多くの人に知られることとなった。

現在、九十九島せんべいはそのネーミングから、お茶うけとしてのイメージが定着しているが、実は発売当初はお酒にも合うハイカラなお菓子として売り出されていた。当時の新聞広告には、お礼の手紙とともに、外国人ファミリーが屋外で、九十

九十九島せんべい



九十九島せんべいを片手にテイータイムを楽しんでいる写真が掲載されていて、とても新鮮だ。佐世保に暮らすアメリカ人からは「99 (ninety nine) クッキー」と呼ばれて親しまれていたというから、いかにもアメリカ文化が花開いた佐世保らしい。九十九島せんべいの原料は小麦粉、砂糖、ピーナッツといたってシンプル。七十四年の時を経て機械化は進んだものの、形も味も発売当時のままだという。歴史を知れば、味わいはさらに深く。銘菓には愛され続ける理由があった。

美しい島々を思い浮かべて パリッ、パリッ



「しゃれた味でした」というコピーが印象的な当時の新聞広告



2024年に発売された九十九島せんべいの姉妹品「九十九島せんべいフィナンシェ」。せんべいの香ばしさをを感じる風味豊かなお菓子は、新たな佐世保名物になりそう。



九十九島せんべい本舗 松浦店 (佐世保市松浦町)



九十九島の海の風景を表現した創業当時のパッケージ



昔の製造風景。九十九島せんべいの独特の製法は特許を取得している。現在は機械化が進んでいるが、やはり職人の高度な技術なしには作れないという。



当時はアメリカ人による工場見学も多かったという。